# さざんか

かとう学園　宗像市立河東中学校
学校通信第20号（R5. 9. 1）

二学期が始まり一週間がたちました。生徒のみなさんは、学校生活の感覚がもどったでしょうか。残暑がきびしいので体調管理に十分気をつけながら、二学期も一日一日成長していきましょう。

二学期は行事の多い学期です。文化祭・合唱コンクールをはじめ、7 年生の宿泊体験、8 年生の修学旅行、9 年生の高校一日体験など様々な行事があります。日常の授業を大切にしながら、行事での個人の能力向上や集団の力を高めていきましょう。

始業式の式辞でお話ししたように、努力と協力の二学期にしてほしいと願っています。「努力はたし算、協力はかけ算」です。「1.01の法則」を日常の努力に生かしてください。

## 九州大会・全国大会へ進出した陸上部！

宗像区大会、筑前地区大会でともに総合アベック優勝を飾った陸上部。県大会にもたくさんの選手が進出しました。さらに、本年度は九州大会や全国大会へ駒を進める選手も出ました。

九州大会は陸上競技の場合、各種目の2位までの入賞者に切符が渡されます。福岡県はレベルが高いため、種目によっては全国大会の標準記録を上回っていても九州大会には出場できないケースもあります。

本校からは、九州大会に共通男子 4×100mリレーで、堀田朔玖さん、藤城泰河さん、後藤貫徹さん、上野幹太さん、女子1500mで中園桜子さんの出場が決まっていました。ところが、会場となる沖縄が台風6号の影響を受け、たいへん残念ながら大会中止となりました。

全国大会は、8 月下旬に愛媛県総合運動公園陸上競技場で開催されました。本校からは、3000mに橋本隆太郎さん、200mに藤城泰河さんが出場しました。新聞でも報道されていたように藤城さんは決勝まで残り、全国 15 位という素晴らしい結果を残しました。

## 新人戦に向けて～部活動・クラブチームの決意表明 Part1

夏の大会が終わり、夏休みの途中から部活動は7・8年生の新チームに移行してきました。暑い盛りに新チームを立ち上げ、意気揚々と新たなチーム作りに励んでいます。クラブチームも含め、秋の新人戦や選手権大会、コンクールや作品作りに充実した日々を送りましょう。

そこで、部活動やクラブチームの代表者に新リームの抱負や大会への意気込みを書いてもらいました。（なお、代表者には県立入試の国語の大問4を想定し、200 字以上 240 字以内でまとめてもらいました。）

【　ソフトテニス部　井手 妃愛さん 】

私達ソフトテニス部は、宗像区団体優勝し、筑前地区大会上位入賞を目標として、8 年生 11 人、7 年生 10 人の計 21 人で練習しています。チームのスローガンである“笑顔・努力・感謝～応援されるチームになる”をモットーに普段から地域の方へのあいさつを積極的に行い、声出しを心がけて練習に取り組んでいます。9 月 10 日、9 月 30 日にある個人戦、団体戦の大会では、新チームになって初めての大会なので、良い結果が残せるように日々の練習から頑張っていきたいと思います。応援よろしくお願いします。

# 「この心臓は鉛でできているが、泣かないではいられないのだよ」
## ～　オスカー・ワイルドが『幸福の王子』に描いた世界　～

子どもと大人の違いの一つに、自分本位と他者本位の考え方の違いがあると言われます。子どもは、自分のことを中心に考えて生活していけばよいのです。しかし、大人になるにつれ他の人のためにどう貢献するかを考えるようになります。「働く・はたらく」の語源は、はた（傍）にいる人・そばにいる人をらく（楽）にさせることともいわれます。中学生は、そうした子どもと大人の中間点・過渡期と言えるかもしれません。今回、紹介する話はアイルランドの作家、オスカー・ワイルドの名作『幸福の王子』という話です。あらすじをざっと紹介しましょう。

昔、ヨーロッパのある町の小高い丘に王子の像が立っていました。この像は全身が純金の延べ板でおおわれ、瞳はサファイア、剣の柄には赤いルビーが光っていました。

そこへ、一羽のツバメがやってきます。ツバメは冬になり寒くなったヨーロッパから暖かいエジプトへわたる途中、金色の王子像に目が留まり、ここで一休みしようと考えました。

ツバメが寝ようとした時、頭上から水のしずくが落ちてきました。見上げると王子の目は涙でうるみ、その涙が黄金のほほを流れ落ちていたのです。

王子はツバメに語りかけます。「私がまだ生きていて人間の心臓を持っていた頃、私は涙がどんなものかということも知らなかった。宮殿に住んでいて、そこに悲しいことなど一つも入ってこず、ただ毎日を楽しく過ごしていたのだ。ところが、死んでから人々が私の像をこんな高いところに置いてくれたものだから、この町中のみにくいこと、悲しいことをひとつ残らず見ることができるようになった。この心臓は鉛でできているが、泣かないではいられないのだよ」

そして王子はツバメに、通りのむこうにいる貧しい家に住んでいる縫物屋の女の話をしました。「彼女の息子が熱を出してオレンジを食べたいと言うが、貧しい女の人は川の水しかあげられない。私の剣についているルビーを取って、あの人にあげてほしい。私は動けないから」。ツバメはしぶしぶその願いを聞き入れてルビーを届けます。お使いがすんだツバメは、王子にこう言いました。「不思議なんですが、こんなに寒いのに、とてもあたたかい気持ちがします」。

翌日、王子はエジプトに飛びたとうとするツバメを呼び止め、屋根裏部屋に住んで、寒さのあまり脚本を書く力もない若い作家の男に片方の目のサファイアを持っていくように頼みます。さらにその翌日、今度はもう一つの目のサファイアを小さなマッチ売りの娘に渡すように言うのです。

両方の目を抜き取って盲目になった王子を見て、ツバメはエジプトに渡ることをあきらめ、ずっと王子のそばにいることを決心します。そして、目の見えない王子のために、町中を飛び回り町の人々の様子を伝えます。話を聞いた王子は、貧しい人たちのために体の純金を一切れずつはぎとって与えるように頼み、ツバメも一切れ、また一切れとはぎとったので、王子の像はたちまち灰色の像になってしまいました。

そして迎えた冬。ツバメはついに寒さに耐えきれず王子に別れを告げて死んでしまいます。ツバメが王子の足元に落ちた瞬間、鉛の心臓は真っ二つにさけます。人々は「幸福の王子がなんてみっともなくなってしまったんだ」と言いながら像を取り壊し、溶鉱炉に入れました。しかし鉛の心臓だけは溶けず、ツバメの死体と一緒にゴミ捨て場に捨てられてしまました。

ある日、その町にやってきた神様が天使に「この町で一番貴いものを持ってくるように」と言いつけました。すると天使は割れた鉛の心臓と死んだツバメを待っていきました。神様はこう言います。「いいものを選びました。この小鳥は、いつまでも私の楽園の庭でさえずらせよう。幸福の王子は、私の黄金の都で永く私の名をたたえさせよう」。

この話はもちろん王子の人々への深い愛情や献身を描いたものです。ただ、ツバメの存在と働きについてしっかりと考えなければならないのではないでしょうか。冒頭に書いた「傍楽（はたらく）」＝「働く」ということを思い返しましょう。ツバメは王子のために働きます。越冬するため南の国へ渡ることを捨ててまで王子の願いをかなえようとします。ツバメが集める情報、ツバメの動きによって救われる人々。この作品を読むとき、このツバメの働きを見落としてはならないような気がします。ここに働くことの意味や大人のあるべき考え方などが象徴的に描かれているように思います。オスカー・ワイルドは、最後の一段落を挿入することで子どものためのハッピーエンドの童話に仕上げましたが、大人の物語としては最後の段落はなしでもよかったように思います。いずれにしても、天才的なストーリーテラーであるワイルドの短編からは、学ぶところ・考えさせられるところが多いのではないでしょうか。